

書評

金廣植著 『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究—帝国日本の「学知」と朝鮮民俗学』

金 泰順<sup>\*</sup>

本書は膨大な新資料の発見に基づき、植民地時代の朝鮮民俗学の展開を帝国日本の「学知」との関わりの中で検証した貴重な研究書である。著者は当時刊行された数多くの朝鮮民間説話集を新たな視点から考察してある。植民地時代の朝鮮民俗学の展開が従来知られていない日本人研究者をはじめ、朴寛洙、申来鉉、金相徳、崔常壽、金素雲などにより日本語による朝鮮説話研究が進んでいたことを明らかにした。

戦後の日本と解放後の韓国において数多くの日韓民俗学研究がなされ、夥しい業績が蓄積されているが、植民地時代の実相に関する研究はきわめて少ない。90年代以降、本格的に植民地文化に関わる研究が進んでいたが、植民地主義批判という問題意識が先行した側面があり、多くの課題が残されている。植民地研究は多様なアプローチが求められている。本書はそのような新たな研究を目指す研究成果として注目に値する。

本書は、1990年代以降の研究成果を踏まえ、残された問題を精密にまとめて、新たな研究の方向性を提示している。植民地時代になされた日本人による朝鮮民俗研究は、植民地時代に日本語で作成されたので、分析の対象から外されてきたが、近年、覆刻本・

※神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員

研究論文などが相次ぎ、客観的な分析の対象となっている。本書もそのような問題意識からのアプローチと思われる。

2012年度に提出した博士請求論文をもとに刊行された本書の構成は、次の通りである。

序章

第1編 日本語朝鮮説話集と新羅神話・伝説

第1章 植民地期における朝鮮説話集の性格

はじめに

第1節 植民地期に刊行された朝鮮説話集

第2節 日本語朝鮮説話集の内容

むすび

第2章 日本語朝鮮説話集と新羅の発見

はじめに

第1節 朝鮮説話集と新羅

第2節 古蹟調査事業と新羅の発見

第3節 新羅説話の内容と分類

むすび

第3章 植民地期における新羅説話の解釈

はじめに

第1節 脱解と「延鳥郎・細鳥女」をめぐる言説

第2節 日本語朝鮮説話集の脱解と延鳥・細鳥

むすび

第4章 新羅伝説の発見者、大坂金太郎

はじめに

第1節 大坂と新羅伝説

第2節 「慶州の伝説」と創られた美談

第3節 新羅説話と日鮮同祖論

むすび

第5章 植民地教科書と新羅神話・伝説

はじめに

第1節 先行研究の検討

第2節 朝鮮読本における新羅説話

第3節 朝鮮読本における脱解

第4節 歴史教科書における新羅像と脱解

むすび

第2編 「韓国併合」後における日本語朝鮮説話集

第1章 高橋亨と『朝鮮の物語集』における朝鮮人論

はじめに

第1節 高橋亨と朝鮮説話集

第2節 朝鮮人論としての資料集

むすび

第2章 清水兵三の朝鮮民謡・説話論

はじめに

第1節 初期日本民俗学と朝鮮

第2節 清水の比較研究

むすび 273

第3章 新義州高等普通学校作文集『大正十二年伝説集』

はじめに

第1節 日本語作文集と朝鮮説話

第2節 『大正十二年伝説集』の構成および留意点

第3節 類型分析と東アジア説話への広がり

むすび

第4章 朝鮮総督府編『朝鮮童話集』と田中梅吉

はじめに

第1節 先行研究の問題

第2節 朝鮮初の童話集の編者田中梅吉

第3節 改作の内容とその意味

むすび

第3編 朝鮮民俗学会の成立と民俗学者の活動

第1章 植民地期における朝鮮学・民俗学・孫晋泰

はじめに

第1節 実体としての朝鮮民俗学

第2節 等身大としての孫晋泰

むすび

第2章 朝鮮民俗学会の成立とその活動

はじめに

第1節 先行研究の検討

第2節 朝鮮民俗学会とその活動

むすび

終章

第1節 本書の成果

第2節 日本語朝鮮説話集研究の意義と今後の課題

附録 1 新たに発見した日本語朝鮮説話集の中の説話目録(25冊) 2 孫晋泰著作目録 3 宋錫夏著作目録

参考文献

初出一覧

あとがき

索引

以上のように、本書は3編で構成されている。第1編と第2編では植民地時代に日本語で刊行された朝鮮説話集(以下「日本語朝鮮説話集」)を具体的に分析し、第3編では植民地期に展開された朝鮮民俗学及び朝鮮民俗学会を実証的に考察している。

著者は、日本人学者による植民地主義に

対し、朝鮮人学者による抵抗民族主義という図式的な二分法によらず、両者の相互関連性・人的関わりを検証している。従来の「日本人の植民史観、朝鮮人の抵抗民族史観」という無難な二分法によらず、時代的背景および人的関係・影響関係にも注目して朝鮮人と日本人の資料を検討したい。それぞれの編者の資料集を比較分析して、朝鮮人編者の思いを捉えることにも努めたい」(10頁)という著者の問題意識からも分かるように、本書は、従来の民族主義に基づいた研究から距離をおき、植民地期における朝鮮民俗学の展開を実証的に分析している。東アジアにおいて歴史問題をめぐる緊張関係が高まっている昨今、著者の問題意識は重要であることは言うまでもない。

まず、本書の内容とその意味を述べたい。

第1編「第1章 植民地期における朝鮮説話集の性格」では、近年の成果を踏まえ、ハングルと日本語による説話集を網羅し、その内容を検証している。また朝鮮説話集の内容と性格を時期別にまとめている。ハングルなどで刊行された朝鮮説話集は、前近代の「才談・野談集」が中心であるのに対し、日本語朝鮮資料集は近代の昔話・伝説集が多いことを導き出している。

「第2章 日本語朝鮮説話集と新羅の発見」では、新羅の伝説が最も多く収録された意味を探り、1910年代に朝鮮総督府が主導した古蹟調査事業との関わりの中で考察し、植民地時代の説話集の刊行の意味を明らかにしている。「第3章 植民地期における新羅説話の解釈」では、日本語朝鮮資料集の中で最も多く取り上げられた新羅第4代王

の昔脱解説話の意味を分析する。また、膨大に資料を駆使して昔脱解説話と「延鳥郎・細鳥女」をめぐる言説と説話集を批判的に比較分析している。

「第4章 新羅伝説の発見者、大坂金太郎」では、慶州古蹟保存会の中心メンバーとして古蹟調査における伝説の重要性を自覚し、それを実践した大坂を実証的に考察し、その伝説集を批判的に見直している。「第5章 植民地教科書と新羅神話・伝説」では、朝鮮総督府編纂の趣意書・教科用参考書・講習録・新聞・雑誌などを広く用いて、朝鮮説話の教科書収録過程を復元している。2年制・4年制・6年制用普通学校教科書を総合的に分析、植民地期における朝鮮説話の言説と教科書の捉え方を相互比較し、植民地教育と朝鮮説話の活用の状況を明らかにしている。

第2編では、数多くの新資料に基づいて日本語朝鮮説話集の中で大きな影響を与えた資料集と新資料を考察し、新たな東アジア説話論の可能性を検証している。「第1章

高橋亨と『朝鮮の物語集』における朝鮮人論」では、高橋の資料集は彼が朝鮮人論を形成していく過程での産物であることを新発掘資料に基づいて明かしている。「第2章 清水兵三の朝鮮民謡・説話論」では、日韓比較民俗学を語る上で重要な清水を考察している。朝鮮民俗学者孫晋泰、高木敏雄からの影響関係を導き出し、植民地期における比較研究の可能性を浮き彫りにしている。「第3章 新義州高等普通学校作文集『大正十二年伝説集』」では、植民地期に中等教育機関で実践された日本語作文集を考察している。「第4章 朝鮮総督府編『朝鮮

童話集』と田中梅吉」では、これまでその編者は不明だった朝鮮総督府編『朝鮮童話集』の編者が田中梅吉であることを初めて明かし、その改作内容を実証的に分析している。朝鮮総督府編『朝鮮童話集』に対する新研究の契機を拓いたことで貴重な成果といえる。

第3編では朝鮮民俗学会の成立と民俗学者の活動を総体的に考察している。まず、朝鮮民俗学会を組織し、朝鮮民俗学の形成に大きく貢献したとされる孫晋泰と宋錫夏の全著作目録を新たに作成して学界に提供した意味はきわめて大きいといえる。著者は孫晋泰と宋錫夏の全業績を丹念に探し集め、その分析に基づいて彼らの活動を実証的に分析している。「第1章 植民地期における朝鮮学・民俗学・孫晋泰」では、民族主義に基づいた先行研究の問題を批判的に見直し、朝鮮民俗学の実相を浮き彫りにしている。それに基づき「民衆の発見者」としての孫晋泰像を検証し、孫のテキストの重層性を導き出して注目される。「第2章 朝鮮民俗学会の成立とその活動」では、肯定論・否定論を乗り越え、実証的に朝鮮民俗学史を検証している。

先行研究における日本人と朝鮮人民俗学者の二項対立を乗り越え、新たに発見した当時の新聞・雑誌記事を丹念に検証し、朝鮮民俗学会とその展開を復元している。朝鮮民俗学会は機関誌を第3号まで出したのみで、活動が中断されたという先行研究を批判的に見直し、朝鮮民俗学会および会員の活動を復元し、植民地時代に展開された朝鮮民俗学の中身を理解する新たな見方を

提示する。特に、先行研究における朝鮮民俗学を理解する肯定論・否定論という対立を冷静に見きわめ、事実関係を明らかにした貢献は非常に大きい。

以上のように、本書は日本語朝鮮説話集を中心に植民地時代の朝鮮における民俗学の展開を日本の「学知」の展開の中で捉えようとした試みである。本稿は重要な事実・史料（資料）を多く発掘・指摘しており、植民地時代の朝鮮民俗学を理解する基礎資料及び研究書ともいえる。著者は結論を急がず、丹念に新たな史料（資料）を発掘してその中身を分析しており、この分野の研究における新たな基盤を形作ったと評価できる。そのような資料発掘の成果は、本書の附録「1 新たに発見した日本語朝鮮説話集の中の説話目録（25冊）」、「2 孫晋泰著作目録」、「3 宋錫夏著作目録」を見通すだけでも明確である。

本書は、植民地時代の資料を明らかにする作業の重要性を改めて示している。戦後70周年を迎える今日、植民地期に展開された日韓比較研究の中身を实証的に検証する意味はきわめて大きい。本書で取り扱った主な分析対象は、民間説話研究に集中されており、依然として今後の課題は多く残されているといえる。本書の刊行を機に、植民地期になされた朝鮮民俗学の各方面に対する厳密かつ詳細な研究が求められる。

平成25年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」助成出版  
(A5判 456頁 2014年2月28日刊 勉誠出版)